

杉浦邦恵 うつくしい実験 ニューヨークとの50年

SUGIURA KUNIÉ: Aspiring Experiments New York in 50 years

2018年7月24日(火)～9月24日(月・振休)



《電気服にちなんで Ap2, 黄色》 2002年
ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

展覧会概要

杉浦邦恵(1942-)の50年にわたる活動を顧みる、日本で初めての大規模個展「杉浦邦恵 うつくしい実験 ニューヨークとの50年」を開催します。

現在ニューヨーク在住の杉浦は、1963年、20歳の時に単身渡米し、シカゴ・アート・インスティテュートで写真を学びました。卒業後、ニューヨークに移り住み、現在に至るまでチャイナタウンのスタジオで創作活動を続けています。

杉浦が作品制作をはじめた当時のアメリカは、ロバート・フランクやダイアン・アーバスに代表されるモノクロのストレート写真が全盛時代にありました。しかし、杉浦は写真というメディアの表現としての多様な可能性にいち早く注目し、カメラを使用しないで写真を制作するフォトグラムやコラージュによる作品制作を行うほか、写真の液体乳剤と油絵キャンバス、アルミニウムなど紙以外の素材と組み合わせるなど、実験的な作品制作に取り組んできました。

本展では1960年代後半からシカゴ、ニューヨークで作品制作を続けてきた杉浦の活動を通して、彼女が生きてきた時代背景と美術・写真の歴史の変遷を視ながら、杉浦がいかに先駆的であるかを浮かび上がらせようとする試みです。

主な出品作品 (出品点数 75点) ※詳細は別紙の作品リストをごらんください

パート 1 孤 1966-67年 Cko (15点)

シカゴ・アート・インスティテュートでの学生時代の作品群。モノクロのフィルムでカラー印画紙にプリントをしたり、市松模様を施してみたり、写真の一部を多重露光してイメージをモンタージュしたりなど、カメラの特性や暗室作業を駆使し、実験的な手法により制作した。写真技術の基本を一通り習得した後、今度はそのプロセスを崩していくことで、創造の可能性が開けると考えていた。

パート 2 フォトカンヴァス 1968-1971年 Photocanvas (5点)

写真－絵画 1976-1981年 Photo-painting (9点)

フォトコラージュ 1976-1981年 Photo-collage (8点)

1967年にニューヨークに移住した後、感光材をカンヴァスに塗って白黒写真のイメージを定着させるフォトカンヴァスを制作。アートディーラーのリチャード・ベラミーの批評を受け、試行錯誤の制作活動が続いた。セントラル・パークで撮影した岩のクローズアップをフォトカンヴァスにした《セントラル・パーク 3》(1971)を、ホイットニー美術館のアンニアル展「1972 Annual exhibition contemporary American painting」(1972年)に出品したのをきっかけに、杉浦の存在が広まっていった。その後も、当時、写真が絵画や彫刻よりも重要でないと思なされていた認識を変えたいという思いで、新しい材料や手法にチャレンジし、自身の絵画を組み合わせた〈写真－絵画〉やフォトコラージュなどに取り組んだ。

パート 3 フォトグラムとインスタレーション 1980年－ Photograms and Installations (26点)

写真と絵画を結ぼうとする試みとして制作されたフォトグラム作品。カメラを使わず、生物を直接印画紙の上で一晩置いた後、感光させた作品は、時間を記録する写真の特性を意識している。また、自身の手術をきっかけに興味を抱いたレントゲン写真のインスタレーションを、1996年にツァイト・フォト(東京・日本橋)で発表した。

パート 4 アーティスト、科学者、親愛な 1999年－ Artists, Scientists, Intimate (9点)

90年代から人物を被写体にした作品制作をはじめ。きっかけは1978年、ニューヨークでの篠原有司男との出会い。後に撮影した篠原のボクシング・ペインティングのパフォーマンスからアイデアへとつながった。篠原によって日本の美術界とも交流が広がり、アーティストと科学者などのポートレートシリーズへと展開していった。

パート 5 DG フォトカンヴァス 2009年- DG Photocanvas (3点)

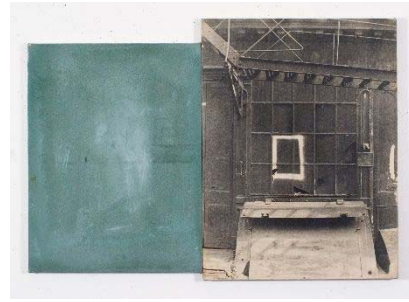
日本で撮影した最新作。デジタルプリントによる作品を初展示する。日本各地の岩肌のクローズアップは、初期のフォトカンヴァス作品を彷彿とさせる。



1



2



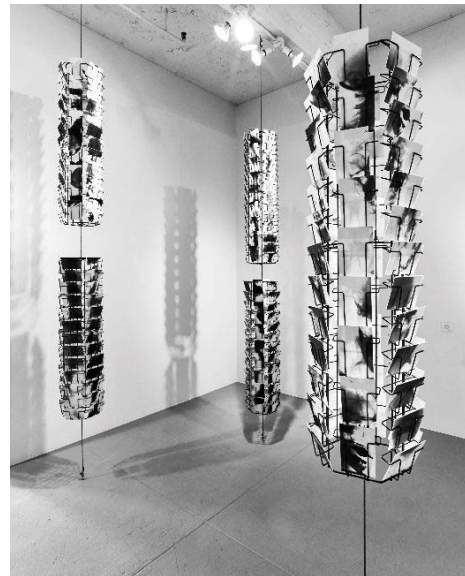
3



4★



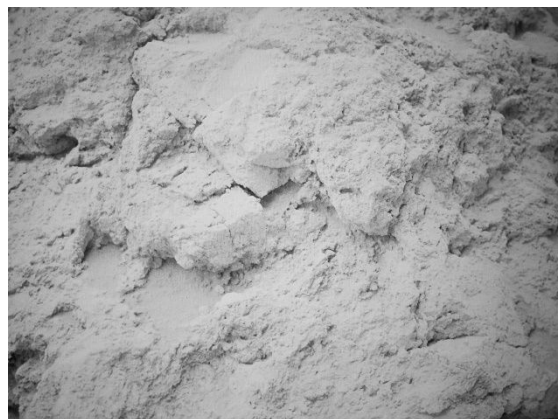
5



6



7



8

1)《孤 #4-V2/2》1967年 発色現象方式印画 東京都写真美術館蔵 2)《孤 #L9-V1/3》1966年 発色現象方式印画 東京都写真美術館蔵 3)《市場の前面》1978年 写真乳剤 アクリル絵具 カンヴァス 作家蔵 Courtesy of Taka Ishii Gallery 4)《木の幹 2》1971年 カンヴァス 作家蔵 ★参考図版 5)《飛び跳ねる D ポジティブ》1996年 ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵 Courtesy of Taka Ishii Gallery 6)《(レントゲン) 棚のインスタレーション》1994年 ゼラチン・シルバー・プリント アクリル 金属製棚 ワイヤー 作家蔵 7)《ジェームス D ワトソン Dp2》2004年 ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵 8)《桜島 B》2016年 インクジェット・プリント アクリル絵具 カンヴァス 作家蔵

杉浦邦恵スペシャル・インタビュー

1963年に渡米し、67年からニューヨークを活動拠点とする杉浦邦恵は、表現の手法としての写真にいち早く注目した実験的な作品群で知られています。日本国内における初の回顧展を迎える彼女に、試みてきた挑戦の数々や、作品の制作意図などについて伺いました。
(2018年5月)

ニューヨークのアトリエにて



ー1963年に二十歳で渡米されていますが、その当時、写真をファインアート（芸術）として制作することは、アメリカでも珍しかったのではないのでしょうか？

私が入学したシカゴ・アート・インスティテュートはシカゴ美術館の附属大学だったのですが、この美術館はアメリカの中でもかなり進んでいて、すでに写真作品を収蔵し、展示もしていました。また、すぐそばにはイリノイ工科大学があって、そこにモホイ＝ナジが創設した写真部がありました。ハリー・キャラハンやアロン・シスキンドがナジの教え子として有名な写真家ですが、私の指導教官だった2人の教授は、彼らの教え子だったんです。だから、とても特殊だったのかもしれませんが、たいへん恵まれた環境だったと思います。

ー学生時代に制作された「Cko」シリーズでは、白黒フィルムでの二重露光やカラーモニタージュ、魚眼レンズの使用など、さまざまな実験を繰り返したとのこと。自分なりの方法を模索した時期だったのですか？

過去全体を振り返ると、大学生時代だけでなく自分はプロセスを通じて新しい作品をつくることに興味があるんだと改めて思います。写真は科学の産物だから、実験しながらプロセスを壊していくことで、新しさを生み出し、次の段階へと突破できる可能性があるんじゃないかと感じました。渡米する前、日本の大学では物理学を専攻していましたから、科学系のほうが自分にはなじみやすかったというのもありますね。

ー「Cko」とは、どういう意味なのでしょう？

漢字にすると孤独の「孤」になるんです。「Ko」よりも「Cko」としたほうがしっくりきたんですね。渡米してからすぐにケネディ大統領暗殺事件があったり、しばらく英語で苦労したりといろいろありましたから、その当時の気持ちが表れていたのかもしれない。

ー大学を卒業された後、拠点をニューヨークに移されました。1972年に、ホイットニー美術館のアニュアル展「1972 Annual exhibition contemporary American painting」に選出された作品《セントラル・パーク 3》(1971)は、まるで抽象画のような作品です。どのように制作されたのですか？

あれはモノクロのフォトカンヴァスなんです。元の写真はニューヨークのセントラル・パークにある岩の一部をカメラで接写したもので、そのイメージを、感光材を塗った1.5×2mサイズのカンヴァスに定着させました。

ーホイットニーのアニュアル展はアーティストの登竜門とされる展覧会ですね。出展されたことでまわりからの評価や環境も変わったのではないのでしょうか？

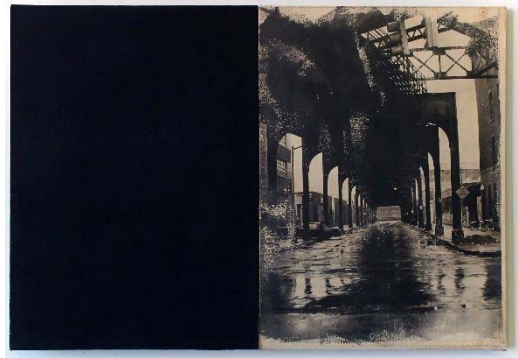
出展できるのは作家1人につき1点だけでしたが、それでも反響は大きかったですね。美術館に収蔵していただいたり、ニューヨークのソーホーにできた新しい画廊で個展を開催したりすることができました。そのほかに、地方の美術館でのグループ展やアーティスト・イン・レジデンスに招待していただいたのですが、夫と離れて暮らすのがいやで、すべて断ってしまいました。たいへんもったいなことをしたと思います（笑）。

ーフォトカンヴァスの後に、写真とペインティングを組み合わせた作品のシリーズを試みられていますね？

その頃、写真というメディアは小さな版画やドローイングのような位置づけで、絵画や彫刻よりも重要でないと思われていたの
で、その認識を変えたいと思い、新しい材料に注目したのです。

ー80年代からのフォトグラム作品は、ドローイングの延長という意識で始められたのでしょうか？

ドローイングの延長というよりも、写真と絵画を結ぼうとする
試みです。花をフォトグラムにしたときに、その輪郭や影のニ
ュアンスがとても興味深かったので、自然物を材料にしたいと思っ
たんです。作品をつくっていると、自分では意識していなくても、
なんとなく日本の花鳥風月みたいになってしまうところがありま
すね。脳に蓄積されたイメージバンクみたいなものがあるんじゃない
かと感じます。



行き止り 小 1977-2009年 写真乳剤 アクリル絵具
カンヴァス 東京都写真美術館蔵

ーカエルやナマズを撮った作品は、生物を直接印画紙の上に置いて感光したそうですが、「The Kitten Papers (子猫の書類)」(1992)は、猫の姿はほとんど確認できませんね？

暗室の中、子猫を感光紙の上に一晚置いて、朝になってから感光しました。猫が過ごした時間が、体液などの物理的な痕跡によって記録されているわけです。写真に一瞬の記録と長い時間の積み重ねを盛り込もうという試みです。

ーニューヨーク近代美術館 (MoMA) が開催してきたシリーズ展「New Photography」は、写真の最新動向を紹介する展覧会としていつも大きな注目を集めますが、1997年に参加されていますね？

「New Photography 13」に参加しました。出展したのは、花をモチーフにフォトグラムで制作した「Cut Flowers, Stacks」というシリーズでした。確かに影響はとても大きかったですね。あの展覧会の後、私から自分のことを説明しなくても、人々が「あなたは写真家だね」と言ってくれるようになりましたから。

ー90年代末から2000年代に制作された「Artists and Scientists (芸術家と科学者)」はアーティストや科学者のポートレイトをフォトグラムで撮影したシリーズですが、「after Electric Dress Ap2, yellow (電気服にちなんで Ap2, 黄色)」(2002)だけ、作家さんご本人ではなく、モデルを使って撮影されていますね？

あの作品は、田中敦子さんの作品「電気服」に触発されて制作したものです。1994年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で「Japanese Art after 1945: Scream against the Sky (戦後日本の前衛美術)」展が開催されて、そこに出品されていました。そのあまりの美しさに、脳裏に焼きついて頭から離れなくなりました。言ってみればオブセッションのようなもので、彼女の偉大さを打ち破るための、私の挑戦だったと言えるかもしれません。作品にすれば、いつもそのことばかり考えなくても済むようになるんじゃないかと。ただ、彼女は日本に住んでいたからポートレイトの撮影は難しく、あの時はモデルを使って、クリスマスツリーのライトを巻きつけて撮ったんです。

ー今回、日本で初めての大規模個展となりますが、どんな気持ちで臨まれていますか？

せっかくだいた機会ですから、ベストを尽くしたいですね。自分にしかできないコミュニケーションの能力があるとしたら、それを発揮すべきだし、これまでいろいろなものをいただいて成長してきたのだから、作品を見てくださる方や次の世代にシェアしたいと思っています。

(インタビューと文 富田秋子)

※当館公式ホームページでは、ロングバージョンを掲載中！ニューヨークでの転機や9.11の心境なども語っています。

関連事業

① 杉浦邦恵によるレクチャー

2018年8月4日(土) 14:00-15:30

会場 東京都写真美術館 1階スタジオ

入場料 無料/要入場整理券 定員 50名

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布。入場無料、整理番号順入場、自由席

② 対談シリーズ

2018年7月27日(金) 18:00-19:30

あがた森魚(ミュージシャン・映画監督) × 杉浦邦恵

会場 東京都写真美術館 1階スタジオ 定員 50名

2018年9月22日(土) 14:00-15:30

榎木野衣(美術評論家・多摩美術大学教授) × 杉浦邦恵

会場 東京都写真美術館 1階ホール 定員 190名

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布。入場無料、整理番号順入場、自由席

※プログラムはやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください

③ 展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

展覧会図録

出品作品図版、テキスト、作家年譜などを掲載した展覧会図録を発行します。

執筆者 ヴァージニア・ヘッカート(J・ポール・ゲティ美術館キュレーター)、榎木野衣(美術批評家・多摩美術大学教授)、鈴木佳子(当館担当学芸員) 発行 東京都写真美術館 価格 3,240円(税込)

開催概要

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：東京都写真美術館支援会員

会場：東京都写真美術館 2階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間：10:00-18:00(木・金は20:00まで)、ただし7月26日(木) - 8月31日(金)の木・金曜日は21:00

まで開館 ※入館は閉館の30分前まで

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館)

観覧料：一般900(720) 学生800(640) 中高・65歳以上700(560)

※()は20名以上の団体料金

※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第3水曜日は65歳以上無料、7月26日(木) - 8月31日(金)の木・金曜日18:00-21:00は学生・中高生無料/一般・65歳以上は団体料金(※各種割引の併用はできません)

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（4★を除く）をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

なお、掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして本リリース表紙にあります

《電気服にちなんで Ap2, 黄色》 2002年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵
のご掲載をお薦めいたします。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いいたします。

また、図版のトリミングや文字掛け等の加工はできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp 丹羽晴美 h.niwa@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp

「杉浦邦恵 うつくしい実験 ニューヨークとの50年」展 展示パネル

1. 孤 1966-1067

シカゴ・アート・インスティテュート (SAIC) での1年目 (1963-64)、杉浦は彫刻や陶芸などさまざまな科目を受講し、最終的にケネス・ジョセフソンらが率いる写真部門に籍を置く。杉浦が師事したジョセフソンは、イリノイ工科大学「デザイン研究所」の出身で、この研究所の前身が、1937年にラースロー・モホイ＝ナジによって創設された「ニュー・バウハウス」だった。実験精神や、その先駆けともいえるべき「ニュー・ヴィジョン」の伝統を受けついで SAIC の写真コースで、杉浦はカラー写真の授業を受講し、卒業制作に向けてシリーズ〈孤〉を制作する。

孤独の一字を取って「孤」と名づけられたこのシリーズは、ビル・ブランツの「パースペクティブ・オブ・ヌード」から閃きを得て、魚眼レンズにより裸体のモデルを撮影。モノクロとカラー・フィルムを使い分け、ソラリゼーションや漂白、時に調色なし、などを試る。ヌード像と風景、格子模様など抽象的なパターンを組み合わせ、多重露光を行なうなど、歪み、渦巻くような形態と、赤や紫、ゴールド、緑など豊かな色彩と、有機的で幾何学的なモチーフが錯綜する複雑なイメージをつくりだしている。

これらの作品によって杉浦はアーティストとして一步を踏み出す。実験精神や試行錯誤を繰り返し、新たな発見や経験を導き出すアプローチは、半世紀を経た今も杉浦と写真との関わりにおいて一貫している。

2. フォトカンヴァス／写真－絵画／フォトコラージュ；1968-1981

1967年、シカゴでの学士課程を終えた杉浦はニューヨークに移り、市内アッパーウエストのアパートで生活を始める。カラー現像の設備が整わない環境のため、モノクロ写真の印画を、木やアルミ、セラミックなどの表面に感光剤を塗って実験した結果、カンヴァスでの制作に落ち着く。感光剤の露わな筆触が絵画的な肌合いを持たせ、グラフィットとアクリル絵具による画面への補正が作品のテクスチャーやコントラストを強調させている。

杉浦の関心は次第に、写真から絵画へと移り、絵画制作に集中するようになる。しかし、それから2年後、薄く塗られたモノクローム絵画の1点がたまたまフォトカンヴァスの作品の隣に置かれているのを見て、杉浦は再び写真を取り上げることになる。同じひとつの作品の中で写真と絵画を並置すれば、「ラディカルでオリジナル」な結果が生じるのではないかと考えたのだ。また、「モノクロームの抽象画と実際の場所やモノを写した写真イメージの共存は、ダイナミックな緊張感を生み出した」とも語っている。写真と絵画によるハイブリッドな形態は、異なるサイズのフォトカンヴァスと絵画を木枠のフレームによって繋ぎ合わせるという展開もあり、作品は彫刻的な側面をも見せることになった。

これら大きなスケールのカンヴァス作品と並行して、エッチング用の紙に写真や色紙、色見本のシートなどを並べたコラージュ作品も〈写真－絵画〉の習作として制作された。ここでは、色、形、プロポーションなど構成自体の探究が見られる。

3 フォトグラムとインスタレーション 1980-

1974年、杉浦は、チャイナタウンのビルに移転する。今日まで彼女の住まいとなっているワンフロアの広々としたスペースを得たことは、写真と他のメディアのハイブリッドな関係性を追求する彼女の仕事にさらなる展開をもたらした。1980年頃には、暗室で印画紙にアクリル絵の具でドローイングを試みるようになる。抽象的なモチーフや、ティーカップや花など日常的なイメージの描写だったが、ときにモノ自体や彼女の手の部分がフォトグラムの形で残ることがあった。杉浦はこのフォトグラムの技法に真正面から取り組むことを決意する。

写真の創成期にあるこの技法は、カメラもフィルムも使わず、印画紙に直接置かれたモノの位置や厚みに応じてイメージが生み出される。露光の段階で、モノによって遮られた部分は感光せず、白い影、いわば不在の部分となって残る。一方、それ以外の部分は感光して黒っぽくなる。モノの影の定着である。この「影を定着させるアート」としての写真の概念は、写真技術のもっとも早い時代に遡り、具体的にはウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットによるフォトジェニック・ドローイングの発見として知られている。

写真初期の実験的な技法に戻ることで、杉浦は再び、科学とアートの両方に通じる写真の基本的な繋がりを認識することになった。最初のフォトグラムに登場したのは生花であり、近所の小売店や、ミッドタウンの広大な花市場が供給源となった。現像に際しては、印画紙の一部に湯を注ぐことで意図的にプロセスを妨げ、背景となる色味にバリエーションを加えることもあった。

花のフォトグラムに着手した後、杉浦の自然のレパートリーは生き物へと広がる。1990年代を通して、イカや蛸(1990)、子猫、ヤモリ、カタツムリ(1992)、金魚や熱帯魚(1995)、カエル、コオロギ、ウナギ、雌鶏、ヒヨコ(1996)などがスタジオに持ち込まれ、それぞれ印画紙の上で動くままに任せ、フォトグラムが制作された。杉浦のフォトグラムはどれも一点もの作品であり、アーティストと小動物とのコラボレーションとなっている。杉浦が材料と状況を用意し、動物たちの自然な行動がイメージを構成し、予測不能な生き物の生態を写真イメージに定着している。

また、一連のフォトグラムのプロジェクトとして、杉浦は自らの入院体験をきっかけに、見知らぬ患者の処分されたさまざまなレントゲン写真を集め、それらをネガとしてプリントを作成し、頭蓋骨や胸部、脊椎など人体各部の影像をひと続きの解剖図に見立てるなど、インスタレーションによって試みている。

4 アーティスト／科学者／ボクシングの書類／親愛な シリーズ；1999-

1999年、杉浦は、フォトグラムの手法によりアーティストの肖像シリーズに着手する。暗室の壁に大判の印画紙を貼り付け、アーティストそれぞれの作品を連想させる仕草を演じてもらう。篠原有司男は「ボクシング・ペインティング」の再現を、村上隆の場合には、壁に描かれる「スーパーフラット」なアニメのモチーフとし、草間彌生は、彼女のパフォーマンス「ウォーキング・ピース」(細江英公撮影)での傘と花の飾りにヒントを得ている。また、ジャスパー・ジョーンズは黒のアクリル絵具、薄力粉と水を混ぜて顔に塗った後、印画紙に片方の耳と鼻を押し付け、さらにもう一方の耳の跡をつけて、印画紙の前で彼が横向きに立ったところをフラッシュで発光。蔡國強は沢山の花火を持ってスタジオに現われたが、いちばん小さいものをテープで印画紙に貼付け、フラッシュの発光と同時にマッチで花火に発火させた。

数時間に及ぶセッションの中、写真家と被写体との間に共感が生まれ、互いの目的が合致し、これはという仕草を引き寄せる瞬間がやってくる。その仕草に、杉浦はストロボの光を浴びせる。具体の代表作家、故田中敦子の1956年のパフォーマンス《電気服》の再現では、杉浦はモデルを使い、内部から光り輝く人体像の投影に成功している。

杉浦の肖像プロジェクトは、2003年、アーティストから科学者へと対象が広がっていく。この年は、DNA構造体の発見から50周年を迎えた記念の年であり、新シリーズは、「何かを与える喜び(JGS)」という写真財団の助成によるコミッション制作として始まった。アーティストから科学者へと対象が広がっていく。科学者たちは、杉浦の仕事に好奇心を示し、彼らの業績を示す一種のビジュアルや仕草を考える上でも実にオープンで意欲的だったという。DNAの発見者として知られる分子生物学者ジェームズ・D・ワトソンは、二重螺旋の模型を手に持った姿で現れ、心臓学者P・K・シャーは、実験用マウスと戯れたり、その鼓動に耳を澄ましたりといった仕草で登場する。

複数のパネルによる＜親密な＞シリーズは、杉浦のスタジオやラブホテルの中のカップルの1時間をさまざまな姿態で捉えたもの。縦長のシルエットを刻む立ち姿のポートレートと違って、絡み合う二人のイメージは、真上からの俯瞰図的なアングルに特徴がある。

5. DG フォトカンヴァス 2009-

創造の源泉を探索したいという思いに駆られ、太古の昔に遡る海辺や山岳地帯を訪れては、自然の中の原初のパワーに触れている。そんな場所のひとつが、鹿児島県にある活火山、桜島だ。もうひとつは、栃木県の塩原であり、30万年前に発生したといわれるカルデラ火山や滝、温泉郷で知られる観光地でもある。もとより、杉浦が求めているのは、風光明媚な景観ではなく、生命の起源やエネルギーの噴出を暗示させる微細なものたちだ。鉱物や化石が、杉浦の新作のモチーフを形成している。そのイメージは、特定の場所に関するものであれ、果てしない悠久の時間を表しているようだ。

撮影したフィルムをデジタル・スキャン後、インクジェットでカンヴァスに印画。この方法を杉浦は2009年より開始し、2016年より日本での撮影を開始している。